

# 新たな地域歴史資料学の形成をめざして —阪神・淡路から東日本大震災に至る地域 歴史資料の保全活動の知見を基礎に—

神戸大学 大学院人文学研究科 教授  
**奥村 弘**



### 研究の背景

1995年の阪神・淡路大震災において、歴史学関係者は地域の歴史資料の大規模な保全活動を行いました(図1)。私は保全組織「歴史資料ネットワーク」の代表としてこれに深く関与しました。この活動をはじめとして、頻発する地震や水害時に、日本各地で地域歴史資料を保全する活動が行われ、その中で関係者の連携も深まりました。この中で私たちは、歴史学の社会的な意味を深く考えさせられました。防災・減災において、過去の災害を知ることが重要であるという点だけではありません。私たちは被災現場で、家族や地域の記憶を未来に引き継いでいくために、地域の人々によって営々と保存されてきた様々な歴史資料に出会いました。また復興すべき地域社会が、歴史的にいか形成されてきたのかを知ることが、地域住民の中で重要な意味を持つことを見せつけられてきました。

### 研究の成果

地域社会においてこの役割を歴史学が担うために、地域歴史資料の保全活用をいかに学問的に位置づけるのかが問われました。私たちは、保全に携わった歴史学関係者はそれらを明らかにし、大災害から地域歴史資料を保全する具体的な方法を研究することが必要であると考え、2009年春、科研費により、地域歴史資料学を形成するための研究を開始しました。

研究の中では大規模災害時だけでなく、日常的に地域歴史文化の継承が困難となっていることが浮き彫りになってきました。中山間部ではすさまじい勢いで若年層が減り、高度経済成長期以前、日常的な生活文化として存在していた暮らしも大きく変わっています。その中で、地域文化の継承は地域の歴史として意識的に進めていくことが必要であることが明らかになっています。その一方で、地域住民が地域歴史資料を積極的に保全するとともにこれを活用し、私たち歴史学の専門家と協力しながら、地域住民がみずから地域の歴史を叙述し、そ



図1 阪神・淡路大震災での倒壊した家屋からの歴史資料保全

の中で研究者の地域についての歴史認識や歴史資料論を鍛えていくという方法も模索しています。具体的保全方法としては、この間に大水害が頻発したこともあり、地域住民とともに進める水損史料保全について、多くの知見を得ることになりました(図2)。

### 今後の展望

2011年3月6日、私たちは研究を踏まえ、大規模自然災害に対する地域歴史遺産保全についての提言をまとめるための研究会を開催、たたき台となる草稿について議論を行っていました。その研究会直後に東日本大震災が起こりました。提言をまとめる時間が持てなかったことはとても残念なのですが、現在私たちはこれまでの研究による知見を活かし、東日本大震災の被災地域において、地域歴史資料を保全する活動を進めています。それとともに従来の災害時には考えることができなかった津波や放射能災害、さらに広域的な支援体制などに関する新たな知見を研究に反映させています。東日本大震災における地域歴史資料の保全は、今後十数年にわたり続いていくこととなります。私たちは研究の成果を活かし、被災地での地域歴史文化を支援するとともに、新たな地域歴史資料学の確立に向け研究を進めていきたいと考えています。

### 関連する科研費

平成21-25年度 基盤研究(S)「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」



図2 水損した歴史資料の保全を行う学生・若手研究者

(記事制作協力:科学コミュニケーター 福成海央)